第506号 昭和62年8月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日 第三種郵便物認可

1987年（昭和62年）
8月号（No. 506）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

第41回ウェストン祭
信濃支部……（1）
海外の山……（2）
「ポ隊のアンナプルナ冬季登頂」
「オデールさんを悼む」
ピッケルの渡来と製作（下）
広瀬　潔……（2）
敗戦直後の本会役員住所録
望月達夫……（4）
伊藤秀五郎氏のスイスアルプス登山
……（4）
図書紹介……（5）
モンブラン初登頂200年記念切手
各務良幸……（6）
東西南北……（6）
報告……（9）
「ストレッチング教室」「旭岳スキー対決の記」「山岳映画の会」「探検家列伝集中講座」「京都・岐阜両支部合同山行」「静岡支部報告」ほか
図書受入報告　図書委員会……（13）
会務報告・ルーム日誌・会員異動
……（13）～（15）
お知らせ……（14）（15）

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

●ルーム夏休み
8月17日（月）～22日（土）

第四十一回ウェストン祭

信濃支部

北アルプスの夏山シーズン入りを告げる岳人の祭典、第四十一回ウェストン祭が、六月六、七日の両日、上高地で開催された。

七日は快晴、ケショウヤナギのほわたが舞いおりてくる。

梓川の堤防の上にまで広がった約千人の輪のなか、吉武正子会員の司会で開幕。

蒲生明登信濃支部長の開会挨拶で始まり、地元安曇小学校四年の前田雅春君、有馬恵さんによる献花。つづいて「ウェストン祭の歌」の献歌。

ウェストン師を偲び、山の安全を願い、合わせてこの四月に逝去された「ウェストン祭の歌」の作曲者、辻荘一名誉会員のご冥福を祈って全員で黙禱。

ついで本会の今西寿雄会長の挨拶。今西会長はおおぜいの参加者にねぎらいの言葉を述べたあと、上高地の自然を讃え、近代登山の先達、ウェストン師の上高地での様子を話し、本会の誕生から日本の登山史の現在に至るまでを、たいへん分かりやすく話して下さり、来春の三国合同登山の話で結ばれた。

来賓祝辞があって、今回初の試み、尾崎喜八の「ウェストン祭」の詩が当支部の細井澄子会員によって朗読された。

以上で第一部の式典が終了し、つづいて記念行事が行なわれ、吉沢一郎名誉会員による講演。ウェストンの墓にまつわるお話しなどのなかに、同氏の登山観などおりこまれ、ユーモアあふれた、内容の濃い講演を頂いた。同氏は数日前、腰を痛められたにもかかわらず、真夏並の暑さのなか、用意した椅子にもかけずお話し下さった。

このあと、ウェストン祭参加三十年のエーデルワイス・クラブ九十人と、地元松本の小中学生からなるアルプス少年少女合唱隊三十名による「歓びの歌」「夏の山」「雪山讃歌」「今日の日はサヨーナラ」の大合唱が梓川べりに、穂高の峰みねに轟かんばかりに響き渡り、「山を愛し、人を愛し、楽しい良い山行を」の呼びかけで、正十一時に今年のウェストン祭は終った。

なお、当日の記念品はゴゼンタチバナの木彫りの記念章と当支部の金光義朗会員デザインの手拭で記念ブローチは昨年より筑摩工芸研究所に通う障害者の方々の手づくりによる作品。

＊

ウェストン祭

まる一年後の六月のこの日を待って
都会を遠く山坂をこえて来て見れば
ありがたいかな、私の愛の上高地は、
その姿、その美しさ、その品位
すべて去年と、いささかも変らない。
前穂も奥穂も北穂も焼も霞沢も
梓の谷も森も林も
厳として聳え涼々と流れ
新緑の雲に包まれて
そこに鳴りひびく小鳥の歌
小径をいろどる山の花
すべては憧れの夢さながらだ。
この再会を楽しみに働いた一年間
それを思えば、今日の満足、
この喜びもひとしおだ。
旧友の顔や姿になつかしく見とれ
新しい友と契りに集いに、
老いた身も心も共に若やぐ
古くして新しい体験と感激との
これが本来のウェストン祭だ。
一年を待ち望まれた、ウェストン祭の
これが真の姿だ。本当の意義だ。

（尾崎喜八作詩）

＊

記念山行

ウェストン祭記念登山の徳本峠越えの朝、島々の登山口は、思い思いの身支度をした懐かしい山仲間達が集まり、それぞれに笑顔で挨拶を交わし、待ちに待ったウェストン祭の開幕にふさわしい風景を繰り広げていた。

登山口では、毎年、島々の婦人会の皆さんが用意してくれるお茶の接待があり、島々谷から流れてくる冷たい川風の中、峠へ向かう体をあたためてくれ、こうした地元の人達の協力に支えられて今日の記念登山があるのだと、心から感謝する思いであった。

出発式で支部長並びに安曇村長の挨拶を受けた後、峠越えの人達は、かつてウェストンも越えた新緑に輝く峠への道を歩き始めた。

岩魚留小屋へ着くと、今年は雪が消えるのが早く集めるのに苦労したという山菜を御馳走になり、時代を刻んだ「いろり」から去り難い気持ちを抑え、峠へと向かった。

ウェストンも苦労して登ったつづら折りの登山道は、整備されたとは言え、今もその苦しさは同じで、途中で休んでいる人に「あと少しですよ」と声を掛けながら峠への苦しい登りをつめると、島々谷や、梓川を隔てた穂高連峰を眺めながら休んでいる人達の満ち足りた顔や、活気に溢れた声が峠にこだましていた。

お知らせ電話 234六六五九

峠の小屋へ入ると、名前は知らないが、毎年顔を合わせる登山者が何人かいて、この祭りが山岳会のみならず山を愛する人々に定着して今日に至っていることをつくづく感じ、先人の努力に頭の下がる思いであった。

峠の小屋からは、足取りも軽く上高地へと下った。（角田啓蔵）

＊

昨年の第四十回が終ったあと、数回にわたって反省会を開き討論を重ねた結果、ウェストン師を慕う岳人が碑前に集い、徳を讃えるという、いわゆる原点の姿に戻そうということになりました。

こうして長いあいだご協力頂いてきた関係者の方々のご理解を願い、今回の第四十一回開催となったわけですが、今後は前にも述べたように、形式化したり、表立ったものなどは極力抑え、あの戦時下、ウェストン師レリーフ取りはずしに臨んだ先輩方のように、四面楚歌のなかでも失われることのないウェストン師に対する敬愛の念、山を愛する心、といったものを尋ねる集いに致したいと思っております。会員諸兄氏のご協力を心よりお願いする次第です。

なお、現地本部、直会会場については、約二十回もの長いあいだお世話になった西糸屋から、上高地旅館組合の希望で、まわり持ちにということで、今回は上高地温泉ホテルとしました。

この紙面をお借りして西糸屋山荘に謝意を表します。以上をもって第四十一回ウェストン祭の報告とします。

（ウ祭実行委員会・田中弘美）

ピッケルの渡来と製作（下）

広瀬　潔

中村清太郎と辻村伊助の模作

明治四十二年頃、中村清太郎が、スイスから帰国したある学者が持ち帰ったピッケルを借り、日本橋堀留の鍛冶屋と江戸橋の棒屋に模作させた。翌四十三年、後立山登山の際持参し、野営の際には天幕の支柱にも応用している。更に辻村伊助がそのピッケルを借り、同じ鍛冶屋と棒屋でピッケルを作らせている。

（付記1）小島烏水著「日本アルプス」第三巻に載っている茨木猪之吉作の「ピッケルを持った小島烏水戯画」は、茨木が中村清太郎のピッケルをみて、それをヒントに画いたものと、いわれている。

（付記2）この中村清太郎のピッケルは（各方面に問い合せてみたが）現

海外の山

ポーランド隊のアンナプルナ冬季登頂

昨年来日したポーランドの登山家の一人、陽気な、小柄で口ひげを生やし、丸い目をしたクシストフ・ヴィエリッキ氏を覚えている会員もおられると思う。このヴィエリッキ氏が昨年暮からのアンナプルナ遠征に加わり、著名な女性登山家のワンダ・ルトキエヴィッチと頂上を目指した、という記事がスイス山岳会会報に載っていたので、翻訳し、お知らせします。ヴィエリッキ氏は八〇年冬にエヴェレストを初登頂、八四年にはBCからブロード・ピークを日帰りで登頂し、八六年はククチカとカンチの冬季初登を果しています。

（海外委員会）

＊

一九八六から八七の冬、ネパールでは十四の遠征隊が行動した。十二月初め、UIAAで承認する冬季シーズン前、それらのうちの三隊が所期の目的を達した。二隊がプモリ（七一六一㍍）に、一隊がタヴォチェ（六五〇一㍍）かロブジェ（六一四五㍍）に登頂した。例年のごとく、正規の冬はクリスマスに入ってからだが、寒気、降雪、嵐によって僅かな登頂期間しかなく、十隊が撤退を余儀なくされた。さらにこのとき二人の犠牲者を出している。

僅か一隊だけ持ちこたえたが、それがアンナプルナに遠征したポーランド隊である。一月十八日にベースキャンプ（四二〇〇㍍）を設営すると、彼らはノーマル・ルートにラッシュ・タクティクスで（一月二十二日から三十一日までに）四つの高所キャンプを設置した。天候の悪化はかなり激しく、気温はマイナス三〇度に下がり、降雪と嵐は前進を困難にした。それにもかかわらずイエジー・ククチカとアルトゥール・ハイゼルは二月一日にC4から頂上へ向かった。七四〇〇㍍にツェルトを張り、そこで一日休養をとり、二月三日の真夜中を回るとまもなく、ここを出発。降雪と視界の悪さに抗して、ゆっくりと高度をかせぎ、十六時にアンナプルナ（八〇九一㍍）の頂上に達した。二人のポーランド登山家は、ツェルトに戻るまでを入れて、都合十六時間を要した。

一九八四年十二月の韓国隊の成功というこの山についての報告は、信頼に足るだけの記録がないので、このポーランド隊のアンナプルナ冬季登頂が真正のものということになる。ククチカはこれで八〇〇〇㍍峰の十三座に登ったが、同時に四峰（アンナプルナ、ダウラギリ、チョー・オユー、カンチェンジュンガ）が冬季登頂ということになる。

二月六日から九日まで、イエジー・ククチカが率いるこの遠征隊に参加していたワンダ・ルトキエヴィッチとクシストフ・ヴィエリッキが頂上を目指したが、六八〇〇㍍に達しただけだった。

（ユゼフ・ヌィカ）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

在のところ行方不明。辻村伊助のピッケルも関東大震災の時、山崩れが小田原の本宅を襲い、辻村と一緒に埋没してしまった。

高頭仁兵衛の模作

明治四十三年、加賀正太郎はヨーロッパから帰国の際、初代フリッツ・エルクのピッケルを持ち帰り、高頭仁兵衛に見せたところ、高頭は早速それを見本にして、村の鍛冶屋にピッケルを作らせた。実物は現在大町市の山岳博物館に日本山岳会から寄託保管されている。

（参考）因みにウェストンから嘉門次に伝承されたといわれている小斧の型は高頭のものより古いようだ。

ピッケルの製作・頒布・販売

大正期にはいると、ピッケルの知識がそろそろ登山界に広がり、希望者も出てきたので、製作頒布を志す者が現れた。山岳会会員で蔵前高工機械科卒の浜名増雄、金子幾久が趣味的に作り、同志に頒ることを始めている。大正四年の「山岳」（第十巻第一号）会報欄にそのことが公告されている。

一方日本山岳会の勧めにより、本郷東大赤門前の運動具店美満津商店が登山具の製作販売を始め、「ピッケル一本五円」と、「山岳」（同号）に絵入りの広告を出している。

次いで大正十年大阪マリヤが、また大正十二年には大阪美濃が、ピッケルの輸入や製作・販売を始めたが、マリヤは長続きしなかった。

ピッケル輸入の盛況

大正十三年西岡一雄が大阪で好日山荘を開店、昭和七年に東京支店（海野治良担当）を設け、現存する「日本最古の登山具専門店」となって、大正十五年から昭和四年頃にかけてフップフアウフを多量に輸入し、引続きシェンク、シモン、ウィリシュ、ベンドなども順次扱っていた。

大正中期からヨーロッパ・アルプスを訪れる日本の登山家が急にふえて、槙有恒、松方三郎、浦松佐美太郎などが、それぞれ名品を持ち帰ったので、登山界にピッケルの知識が拡がり、登攀技術も進んで、氷雪期の登山が盛んになったため、一流ピッケルの需要がふえた。それで好日山荘は品不足におそわれるほどの盛況を呈した。

デパートの運動具部も動き出し、昭和六年頃から三越がビエルンスタットを輸入し始めた。

大正時代貴重品だったヨーロッパ製ピッケルも、昭和にはいると、急速に登山界に行き渡り、ついに古道具屋の店頭にまで、出回るほどになった。

国内で特殊鋼ピッケル創作

昭和四～六年頃仙台と札幌で山内東一郎と門田直馬が、世界に誇る「特殊鋼ピッケル」を試作、完成させたことは、余りにも有名。ともに大学山岳部の若い学生（東北大・桝田定司、北大・和久田弘大学に居た折に知り合ったチャールズ・ハウストンらとの英米合同隊で、三六年にナンダ・デヴィ遠征を行ない、ティルマンとオデールの初登頂によって、人類による最高頂の到達記録を更新した。これに続いて三八年にはティルマンとシプトンの主張する小規模隊によるエヴェレスト遠征に、オデールも参加したが、敗退に終った。この時は節約第一のため科学的調査も制限された上、せっかく採集した標本類が箱ごと盗まれたり、さらに四一年にはヒマラヤ研究の貴重なノートブックを「海で喪失」したため、永年にわたる研究の成果を、ついにまとめ上げることができなくなったという。

オデールは二つの大戦で三度も負傷している。四四年に地学協会は、オデールの全業績に対してリヴィングストン金賞を贈った。教授としての最後のポストはパキスタンのペシャワール大学で、一九六〇年から二年間在任、その後ケンブリッジに引退したが、八三年に出身学寮のクレア・カレッジの名誉フェローに推され、非常に喜ばれていたという。

オデールは英国山岳会や地学協会の集会などには、いつも元気な顔を見せ、九十三歳のときヴァリス・アルプスのブリタニアヒュッテまで出かけて、氷河歩きも立派にこなされたという。急逝の二日前にもドン・ウィーランス記念講演会に出席したというから、まことに驚嘆に値いする。

なお、オデール夫人は一九七七年に先立たれたと記されている。

あえて偉大な足跡の片鱗を列記して、追悼の一文とする。

島田　巽

海外の山

オデールさんを悼む

N・E・オデールさんが、本年二月二十一日に急逝された。今世紀における探検・登山への偉大な貢献に敬意を表し、心から哀悼の意を表するために、おくれ馳せながら、ここに小文を草する。

一九八〇年の夏、オデールさんは九十歳の高齢など全く意に介せぬ元気一杯な姿で、来日され、本会主催の映画と講演の会をはじめ、多くの会合に参加された。この折の「オデールさんの話」が田口二郎さんによって、「山」四二五号に報告され、老登山家の横顔が活写されているので、重複を避けるため、私は主としてロンドンのタイムズ紙が掲載した追悼記事のなかから、必要と思われる足跡を拾い出しておきたい。（以下敬称を略）

Noel Ewart Odell は一八九〇年降誕祭の当日、牧師を父として誕生、したがって享年九十六と二ヵ月であった。ケンブリッジ大学のクレア・カレッジで地質学を専攻、一九二〇年にペルシア（現在のイラン）で実地研究に携わったのを皮切りに、海外の諸大学の教職に就いたが、常に山域に近い場所が選ばれたという。

一九二一年と二三年にはスピッツベルゲン探検に参加して、隊員中のアーヴィンの実力を見出し、二四年の第三次エヴェレスト遠征には、ともに参加することになる。マロリーとこのアーヴィンの悲劇で遠征の幕を閉じた際の、劇的な生証人として、また高処での捜索活動に単独で打ち込んだオデールの名は、広く知られ、帰国の際も国王ジョージ五世に単独拝謁の栄を得ている。

その後、渡米してハーバード

海外の山

山をきれいに　ゴミは持ち帰ろう

一）が考案と製作指導に当ったことも、偶然とはいえ珍らしく、登山界に残した功績は大きい。両ピッケルともに好日山荘から市販され、広く登山家の手に渡り珍重されたことも周知の通り。

（付記）厳冬の富士山頂で実地検討

昭和十四年二月末から三月にかけて広瀬潔、深田久弥、和久田弘一の一行が富士山頂剣ケ峰気象観測所に滞在した際、三月一日大火口内の氷壁で、氷具の比較検討を試みている。和久田は門田ピッケル（第一号）、広瀬は山内ピッケル（第七七号）を携えていたが、アイゼンは三名とも門田だった。結果はいずれも良好で、あらためて「特殊鋼」の威力に感激した。（和久田は同日午後下山）翌二日早暁、厳冬の富士山頂では普通考えられない「無風降雪」となった。広瀬と深田は、氷上に積った五〇センチの新雪を利用して、最高峰剣ケ峰絶頂から成就沢（旧名不浄沢）経由、山麓五本松まで標高差二九四五メートルのスキー大滑走に成功した。これは天候に恵まれた偶然の成果だったが、何分氷結面上に積っている新雪層をスキーで切断すると、「表層雪崩」を起こす危険があるので、山頂直下の急峻斜面では（スキー杖を同行の歩行人夫に預け）、万一に備えてピッケルを両手に握り、身構えしながら慎重に滑りぬけた。

（追記）大正九年頃ドイツの雑誌に出ていた絵を見本に、芳野幹一がピッケルを作らせたことは、近刊の「山」（第四九五号）に詳述されているので、省略した。（ただこのピッケルを「国産第一号」？　と述べているのは思い違いではないか）。

敗戦直後の本会役員住所録

望月達夫

毎回古いことばかりで恐縮だが、棺桶へ片足をつっこんだような私には、それが相応しいことかも知れない。ここにお目にかけるのは昭和二十三年度の本会役員住所録である。ごく粗末なワラ半紙にプリントされたもので、うっかりさわると破れる恐れがあるので、補修して会の資料に遺したいと思う。現在これをお持ちの方は少ないと思うし、会の事務所にも多分ないかも知れない。

一見すると、当時をご存知の方たちにはいろいろの感慨が湧いてくる筈である。ここに掲げられた人たちだけが、戦後の会の再建に尽力したわけではないが、少なくもその主力となった人たちであるのは間違いない。

私は昭和二十二年十二月に復員して、間もなく会に顔を出した。従ってこの二十三年度の役員住所録は、私の手許に残っているもののうちでは一番古いものである。

伊藤秀五郎氏のスイスアルプス登山

伊藤氏がアメリカへ留学し、その帰りにスイスに立ち寄り、ブリュムリスアルプホルンに登ったということは、昭和十二年の会報七一号に「巴里便り」として寄せた藤島敏男氏の手紙や、「山に忘れたパイプ」のビーチホルンの写真説明からも分かる。もちろん伊藤氏の「北の山　続編」にある登山譜からもそのことは分かる。しかし、サムエル・ブラヴァント氏の山案内人手帳には藤島氏の記録しかなく、伊藤氏については何も触れていない。ブラヴァント氏は藤島氏の他に誰かいたことは記憶していたが、それが山案内人だったかどうかも覚えていなかった。ただ藤島氏はフランス語しか話さないから、もうひとりの人に通訳してもらい、それでやっと藤島氏と意志疎通できたということは覚えていた。

藤島、伊藤両氏ともこのときの登山について詳しく書き残してはいないようなので、この山の南東に望まれるビーチホルンのきれいな写真だけが、そのときの様子を語っているくらいである。

このブリュムリスアルプホルン登山については、辻村伊助にも似たようなところがある。辻村の場合は、さらに案内人が誰だったか

昭和二十三年度・日本山岳会役員住所録（A・B・C順）

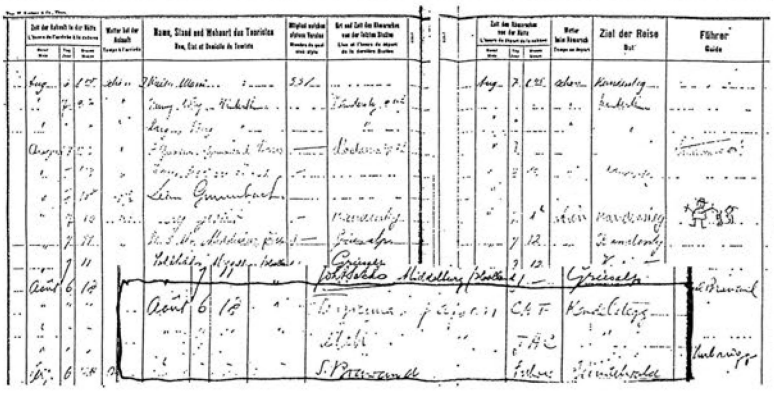
藤井運平　理事
資材
藤島敏男　理事
親睦・再建資金
福井正吉　主事
会計・庶務・資材
浜野正男　常任理事
庶務・会計・組・国
林和夫　理事
啓指（講習会）
堀田弥一　常任理事
啓指（実践登山）
今村正二　理事
研究
入沢文明　理事
渉外・組織・国体
垣内政彦　理事
出版（山）
神山　勉　理事
出版（山日記）
松方三郎　理事長
組織・国体
望月達夫　理事
出版（会報）
村井米子　理事
女子・啓指（講演）
沼井鉄太郎　監事
小原勝郎　理事
事務所建設
関根吉郎　理事
出版（山岳）
島田　巽　理事
出版（一般）
武田久吉　会長
田辺主計　理事
図書
谷口現吉　常任理事
学生
渡辺公平　理事
小屋・案内人
山下一夫　理事
組・国・啓指
（展覧会）
・ハイキング

北多摩郡三鷹町上連雀五一九　交野武一方
商工省化学局化政課　赤坂一三〇一四九
新宿区諏訪町二五ノ三　九段八一八
日本銀行　日本橋二二一一
太田区田園調布二ノ五〇九
大日本体育会　千代田区神田駿河台四ノ六
神田二〇八八、三一二四
埼玉県与野町一三七〇
清水組建設株式会社営業部
京橋五一八一一〇、四一八一一〇
太田区雪ヶ谷二一六
正和商会　太田区上池上町五七三
池上二三五（呼）
杉並区西田町二ノ四一九
光生命保険　中央区日本橋人形町二ノ二
茅場町一三〇一一七
港区麻布龍土町一二　赤坂一三二八
沖電気技術部　三田二一九一四
（内）二六一
杉並区東荻町五
日本交通公社　丸ノ内四一四一一五
分室　丸ノ内一〇一一三
世田谷区北沢一一一二四一
共同通信社（銀二一二一）
市ヶ谷戦犯記者室（丸ノ内四一八一
［二六］五五一一）
足立区柳原町三〇九
神山化学研究所　足立二一四四、二二六三
港区霊南坂町三〇　赤坂一二八三
共同通信社　銀座二一二一、七一〇一
杉並区馬橋二一二三八
三井信託株式会社　中央区室町二一一
日本橋三一八一
世田谷区成城町二五四
婦人記者クラブ　港区芝今町八城南クラブ
銀一八二八、四三〇九
葛飾区堀切町六〇〇
横須賀市逗子町三一四
増田通商　千代田区永田町二一一安藤組ビル
銀五八六一一三
新宿区新小川町江戸川アパート五〇二
九段四六一五
早稲田大学応用化学教室
目黒区柿木坂一八五　荏原八
朝日新聞調査研究室　丸ノ内一三一一四一
千代田区麹町富士見町三
品川区大井鹿島町二九四三
帝銀横浜支店　中区本町二丁目
本局三七三三
神奈川県大磯町西小磯一〇六　大磯一二六
西村工業　渋谷区金王町六〇
渋谷区常盤松五七
港区芝二本榎西町二　小島方
交通博物館　千代田区須田町一一二五
神田一七一二

も分からないし、山頂から撮った写真もないし、頂上に立ったときの印象記もない。

かつてウェストンの来日した年代の確定に関連し、島田巽氏から歴史的事項を扱うことの難しさについて話を伺ったが、外国でのこと、外国人に関わることとなると、日本での資料集めは難しい。

一九二七年発行のベデカによると、そのころブリュムリスアルプホルンに登るにはホートュルリにあるクラブヒュッテが起点だと書いてある。辻村はこの小屋を「ベルネル・オーベルラント」のなかでホートュルリ小屋と書いているが、これは同じSACのクラブヒュッテで、現在ある小屋は、このころあった所よりもう少し高いところに建て替えられ、今もブリュムリスアルプ支部が管理している。



この小屋の古いヒュッテンブッフ（宿帳）は何時頃のものまで保管されているのか分からなかったが、藤島、伊藤両氏の一九三七年ころより更に二十年ほど遡って調べてもらうよう頼んでおいた。

現在のこの小屋の管理責任者、ステックリ氏から送られてきた日本人名の記載があるヒュッテンブッフのコピーは、一九三七年がいちばん古く、一九一八年まで遡って調べてみたが、日本人のものはなかった、と書き添えてあった。上掲の写真のように、一九三七年のものは藤島敏男、伊藤秀五郎、それに山案内人のサムエル・ブラヴァント氏らのものであった。このヒュッテンブッフを見ると、三人は八月六日の午後六時に小屋に着いている。したがって、カンデルステークを午後になって出発したようである。ブラヴァント氏はグリンデルヴァルトからやって来たようなので、藤島氏らはここでブラヴァント氏と合流し、それから小屋へ向った、ということなのであろう。

藤島氏は山案内人手帳にも書いているようにCAF（フランス山岳会）、伊藤氏はJAC、とその所属する山岳会名を書いている。

翌七日、三人は再びこの小屋に立ち寄り、到着時間を十二時と記入しているが、三人の前後に記入している者は、ほとんど八月七日にこの小屋に着いているようだから、藤島氏らは山から戻って、前の日のぶんも合わせ、ここに書きこんだもののようである。また、藤島氏たちのように、山から降りてきたものは他に二人しかおら

図書紹介

水源林の四季
—多摩川上流・緑と水のレポート—

畦倉　実著

東京の上水道が、利根川、荒川水系に依存の度合いを大きく移したとはいえ、多摩川は、明治以来、東京の存立を左右する重要な川でありつづけている。玉川上水などでわかるように、江戸期にも事情は同じで、この川がなかったなら、江戸も東京もいまのような形では存在しなかったにちがいない。

本書は、その多摩川の上流域を、水源の機能をもつ地域という点からレポートしたものである。発行から一年もたって紹介するのは気がひけるが、朝日ブックレットという、書店でも決して優遇されているとはいえないシリーズの一冊で、見落している人も多いと思われるので、あえてスペースをさいていただく。もとは朝日新聞東京版に連載されていたもの。

本書の舞台は、俗に奥多摩と呼ばれて、首都圏の山好きにはおなじみのところ。一部はいわゆる奥秩父の領域にも入る。東京・山梨にまたがり、その大半が都有林、ないしは都が地元から借り受けている森林からなっている。山歩きのコースもいくつもあり、そこを歩いてみればわかるが、植林と自然林が交錯し、豊かな樹相と、その中を清冽な水がほとばしり流れ、野生の熊が棲息するという、人口稠密の大都会からわずか数十キロのところとは思えない。

しかし、この豊かな樹相が、決して気楽に存在しているものではなく、水源林として、きめ細かにコントロールされ、また土地の人の生活の場として手入れされている結果だということをこのレポートは伝えている。自然というものが、経済効果だけの対象物ではなく、自然が人間との共存の中で豊かでありつづけることができる例を私たちはこの地域に見ることができる。もちろん、この地域にも問題がないわけではない。試行錯誤も乱開発も、観光という名の自然破壊や過疎の問題もないわけではないが、いま日本各地で問題になっている開発と保護への一つの解答はあるのではないか。水源林を守るという知恵が生み出した豊かな森と水の過去と現在を、この本は読みやすい文章で要領よく伝えてくれる。多摩川とは縁のない地域の人にも読んで欲しい一冊。

昭和六十一年七月、朝日新聞社刊、朝日ブックレット、定価二八〇円

（大森久雄）

ず、あとは皆、この小屋だけが目的で立ち寄っているらしい。

このヒュッテンブッフの記録からすると、三人は七日早朝に小屋を出て九時ころ頂上に着き、昼ごろ小屋に戻ったことになる。「晴れ」とその日の天候を記入してあるから、山頂からの眺望は良かったのであろう。登頂時刻からすると、南東に見えるビーチホルンは逆光のなかでの写真撮影となったわけだが、空気が澄んでいるせいか、かなりはっきりと撮れている。

藤島氏らが書きこんだこのヒュッテンブッフの同じページに、コミカルな絵が書いてある。藤島、伊藤両氏ともこの絵は見ていると思うので、このコピーをお二人に見せれば、いろいろと当時の思い出話が聞けたはずで、それを思うと残念だ。

こうして伊藤秀五郎氏のブリュムリスアルプホルンの登山は確実な資料によって裏付けされたのだが、あれほどこの山に心引かれていた辻村伊助については、とうとうその登頂を証する資料は出てこなかった。

（岡沢祐吉）

第四十一回　ウェストン祭に参じて

柿原謙一

ウェストン師のわが国山岳界への大きな貢献を偲び、苦難のレリーフの前に立つべく、梓川河畔を辿って碑前祭にむかう。青空のもと雪渓輝く岳沢と新緑が美しい。偶然ながらここで吉沢一郎先輩にお目にかかれた。今日は講話を依頼されたのだという。

JAC信濃支部長やJAC今西会長のご挨拶につづいて、献花と合唱の歌声が流れた。時鳥が啼く。ついで吉沢先輩のお話もすみ、ふたたび登山服装の女性の合唱や地元小学生の歌声が流れ、ウェストン師を讃えた。地味な碑前祭ではあるが、参加者の輪には感謝と感激の念があふれ、心に染み入る滋味掬すべき集会だと感銘した。

信濃支部長・今西会長・吉沢先輩からのお話で、私が痛感したことをまとめると、つぎのとおりである。

ウェストン師のすすめで一九〇五年創設されたJACは、やがて槙先輩のアイガー東山稜の初登攀

モンブラン初登頂二〇〇年記念切手

各務　良幸

私の暁星中学の同級生で医学博士の古川明君は、「切手が語る医学のあゆみ」という立派な本を昨年出版した、医学に関する切手の世界的収集家です。同君より昨年八月八日にモンブラン初登頂二〇〇年記念切手がフランスとモナコで発行されたことを教えられました。

私もケンブリッジ大学留学中の数年は毎年三ヵ月近い夏休みをアルプスの山で過ごし、殊にモンブランには何回も登り、色々懐しい想い出もありましたので、早速、古川君にお願いして記念切手その他の資料を見せて頂きました。以下はその資料によるものです。

十八世紀頃のシャモニーは地味な農村で、そこに住む水晶採りや猟師は、春から夏にかけてはMONTENVERS や FLÉGÈRE 等への案内をして生計の足しにしていた。

フランスで発行の記念切手

一七六〇年にジュネーブの学者のソシュール（HORACE BÉNÉDICT DE SAUSSURE）が、モンブランに初登頂した者に賞金を出すと約束したが、土地の住民は誰一人それに対して興味を示さなかった。この計画は一七七五年になってやっと始められ、一七八六年六月まで断続的に続けられたが、成功した者は一人もいなかった。もう一人、ジュネーブの人で、詩人で文筆家、それに人一倍山を愛したブーリ（MARC THÉODORE BOURRIT）がこの計画に大いに拍車をかけた。

一七八六年八月、遂に二人の優秀な登山家によってモンブランの初登頂が成功した。一人は一七五七年シャモニー生れの医師、パッカール（MICHEL GABRIEL PACCARD）だった。彼はシャモニーの公証人の三男として生れ、長じてイタリアのトリノ大学で医学を修め医師となり、パリで勉学を続け、その後、シャモニーで開業した。また植物学、鉱山学、地質学の研究家でもあり、自ら高山植物園を造ってもいた。他の一人は一七六二年、ペルラン村に生れた水晶採りバルマ（JACQUES BALMAT）だった。二人はアイゼン付き登山靴と金具の付いた杖だけといった簡単な装備で、他に毛布、食料、寒暖計、気圧計等を持って八月七日に登山を始めた。十四時間も雪や氷を踏んで、危険にさらされながら遂に八月八日十八時二十三分に頂上に達した。この快挙は体力的だけではなく、精神力もあずかって注目すべき功績をおさめた。この成功がモンブラン連峯への登山の始まりとなった。

シャモニーの中心地には現在も二人の初登頂者パッカールとバルマ、それに後援者のソシュールのブロンズ像、記念碑等があって彼等の偉業を永

モナコで発行の記念切手

モンブラン初登頂200年

（一九二一年）、およびカナディアン・ロッキー遠征隊のアルバータ峰初登頂（一九二五）という成果をあげる。ついで立教大学ナンダコート登山隊は、一九三六年日本山岳界のヒマラヤ進出の口火を切る。しかし突発した戦争のため、後続は断たれたものの、戦後日本人によるエヴェレスト登頂も敢行され、来年には日本・中国・ネパールの三国合同登山が、世界の最高峰（エヴェレスト／チョモランマ／サガルマタ）に、南北両側よりする交差縦走実施と決定されたという。西欧近代登山を摂取したJACが、ここまで辿った足跡のはじまりは、ウエストン師に負うところが大きいと思う。

ところでそのウエストン師の墓所をたずねた人がある。師と親しかった名ガイド上條嘉門次の曾孫輝夫さんたちである。残念ながら英国でお墓の在所が判明せず、その後さる仁がザ・タイムズ紙に照会してようやく判ったという。墓はさる教会の墓地にあり、夫妻の墓標が確認された。しかし夫妻にはお子さんはなく、墓はあまり清掃されておらなかったらしい。吉沢先輩はここで話を切られたが、有志の間で、何か対策の話もおきているらしい。私はこれをきいたとたんに、JACの音頭で、広く募金をつのり、教会に寄贈して清掃料にあてることが、謝恩のしるしだなと感じたのである。市民ベースでのささやかな国際交流でいいではないか。

碑前祭は十一時すぎに終った。よきお話がきけて、心は青空のごとく爽やかであった。それより西穂山荘まで登って、霞沢岳の威容を展望し、夕刻小梨平のテントに戻る。翌朝も快晴なので、徳本峠から霞沢岳への稜線をジャンクションピークまで辿って、Uターンする。昨日と同様に、針葉樹原生林の残雪を踏む静かな山が楽しめた。

四十一回ウェストン祭
—梓河畔に歌い 続けて三十年—

坂倉登喜子

今年はウェストン祭参加三十回記念に歌の好きな人たちに呼びかけたところ、徳本峠越えの参加者も多く、レベルや日程に応じて、夜行班、島々宿泊班、岩魚止泊班、徳本峠泊班、上高地直行班など五班に分かれて、六月五日より出発、上高地へ七日、約九十名が集合、碑前祭に参加した。

ウェストン祭第一回の時は、小梨平にテントを張り、僅か五人の混声合唱が、前夜祭のキャンプファイヤーの様子と共に放送されたのが最初であったが、あれからもう今年で四十一年目、エーデルワイスが、当時JACの東京支部の歌の講習会で指導を受けた平野先生と共に参加したのが、昭和三十二年、秩父宮妃がお越しになった年であった。

私は過去四十年間、上高地の自然と、諸先輩や信濃支部その他の山仲間との出会いに心牽かれて、ウェストン祭に参加してきたが、今年ほど女性の役割を嬉しく感じたことは無かった。司会も朗読も、そして歌の指揮も日本山岳会団体加入の私たちのクラブの早川菊恵が成し終えて、三人の女性が今年のウ祭を盛りたててくれた。心から喜ばずにはいられない。

もちろん三十回参加してくれた私をとりまく女性合唱隊も、素人だから今日まで続いたのだろう。

終了後、上高地周辺を思い思いに歩いて帰ったが、私達有志は徳沢まで歩き、途中の林でヤマシャクヤクの群落を見つけて大喜び、その夜は徳沢園に泊り、同宿のアメリカのジャーニース・イーストの登山グループと歌の交歓や、翌八日徳沢に来ていた中国ペキン放送の女性ディレクター劉（りゅう）さん達の一行との交流もできて、今年のウエストン祭は実り多い思い出を残した。

200年初登頂 遠に称えている。

フランス発行の記念切手は正面にモンブランの北側を出し、右下にパッカールとバルマの横顔が並んで見える。

モナコ発行の記念切手は、初登頂のルートがモンブランの正面に赤線で印され、右にパッカールとバルマの後姿が見え、左側には賞金を提供したソシュールの顔が前向きに大きく出ている。彼はジュネーブの大学教授で自然科学者、度々シャモニーを訪れ、自らもモンブラン初登頂を試みたが失敗し、初登頂者のバルマなどを連れ、初登頂の翌年に頂上に立った。

小山・福井コレクション（記念館）開館式にあたって

安田平八

去る五月二十四日、本会物故会員、小山寿太郎氏と福井正吉氏の遺品が整理され、そのコレクションを一堂に集めた記念館が建設され、開館式が行なわれました。

場所は長野県小諸市宇東甲で、小諸駅より東南二粁の信越の山なみの眺望の良い山腹です。

鉄骨二階建、約三十坪の記念館は、小山寿太郎氏ご子息、智氏経営の小諸ファッションデパート事務所に近く、独立建物で、森の中の閑静なたたずまいです。

展示品は小山氏、福井氏の古い山の道具、初代シェンクのピッケルから、山靴などは二十数組、スキーやルックザックも時代の変遷を思わせるものも多く、絵画には足立源一郎画伯のジャンダルム他、逸品が揃っております。殊に目をみはるのは、ベルリンオリンピック当時のものの他、各種のメダル、バッジやペナント類、各大学のワンダーフォーゲル部の部誌、山の図書などです。

これらの展示物に錦上花を添えたのは、当日、当会会員、中河与一先生から寄贈された書額であります。中河先生より特にお申し出があり、本年九十歳になられた記念にお書きになったもので、「夜布かきやまのい保里に遊免さめて曽羅和たる月を幾ゆるまでみし」

開館式でのテープカット

九十与一。

「福井正吉先生を偲ぶ集い」として、福井さんにお世話になった後輩どもが、一周忌を過ぎた今、漸くご遺族吉原道江さんのご好意と小山智さんのお力でこの展示記念館が建設され開館式をすることになったものです。五十二名の発起人が福井さんと親しかった方々に呼びかけ、当日には全国各地から、その祝いに数多くかけつけて下さいました。

当会関係では、会長並びに三水会有志の方々より祝電を戴き、渡辺正臣さん、神原忠夫さん、鴫原啓佑さんの他、会員に名をつらねているもの十数名。この他、日本ユース・ホステル協会関係、各大学ワンダーフォーゲル部関係や、ユニセフの橋本正さん（橋本龍太郎大臣の母君）も含め多彩なメンバーが集まりました。

「福井先生を偲ぶ集い」そして「小山・福井記念館」の今後の運営に関し、世話人若干名が選ばれ、福井さんのご遺志を生かし、山で知り合った輪を拡げていくことになりました。

福井正吉さんと私などの交友が始まったのは、戦後お茶の水の岸体育館で、当時福井さんは体協の職員をしておられました。もう四十年前のことです。

それから各大学のワンダーフォーゲル部の創設・育成に、またユース・ホステル協会の創立・発展に、公私を越えて、私ども後進の指導に当られました。全く誰に頼まれるのでもなく、報酬も無く、山で知り合った奴は皆良い奴だから、というだけの理由で若い人々を導いてくれました。

いつも若い女性に囲まれて、パイプをくわえて、ニコニコしておられました。不思議な人でした。

三水会には良く出ておられました。

日本山岳会に推薦入会させた会員も、私の知る限りでも二十人を越えております。

昨年一月八日静養先の那須の南ケ丘牧場で亡くなられ、葬儀では不肖私は葬儀副委員長を務めさせていただきました。その折にも、当会会長他多数の方のご弔問をうけ、その追悼に関し、そのままになっており、心苦しく存じておりましたところ、漸く一年過ぎて、記念館が開館出来ましたので、ここに会員の皆様にご報告し、福井先生のご遺徳を偲ぶ次第であります。

「小山・福井コレクション」所在地

長野県小諸市字東甲一二四の一（目標　小諸ファッションデパート事務所）電話番号　〇二六七―二二―六三七〇

道順　小諸駅より必ず草軽交通のタクシーに乗車、約十分、又は、小海線乙女駅（小諸駅から二つ目）徒歩五分。乙女駅から徒歩の場合は

祕境五家荘久連子の鷹巣山から積岩山を歩く

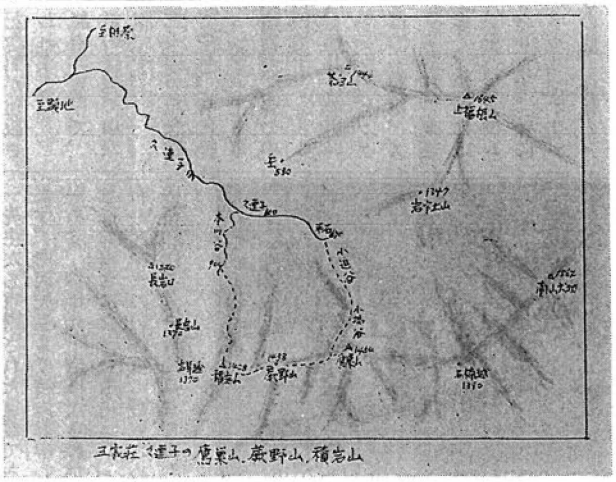
福岡市　渡部智倶人

今では九州中央山地国定公園、五家荘県立公園となったこの地域は九州の脊梁に当っている。その昔、五家荘は三方を山岳に囲まれ、南の人吉で分かれた球磨川の支流、川辺川が山あいを縫って北上し、扇状の枝流を作り、塩の道すらたえだえであった山峡に、延長一年（九二三年）、菅原道真の嫡子、菅宰相が甲佐より仁田尾へ入り、続いて弟の菅次郎が延長四年に矢部より縦木に移住した。下って文応年間（一二六〇年代）に平清経の曽孫、緒方盛行、近盛、実明の三兄弟が白鳥山（一六三九㍍）を出て、椎原、久連子、葉木に夫々、居をかまえたと言われる。

かねてガイドブックにない、この山稜を踏破するために、該当する五木村と泉村の両役場に対し、資料を求めたが、明確なルートの回答がえられず、結局、地元久連子の仲川義人氏（六十五歳）にガイド役を依頼した。彼は猪狩りの傍ら営林署関係の仕事やカモシカ調査員を引き受けている地元住民で、前夜この地方のことなど聴取でき、多大な収穫であった。

この山系は有名な五木の子守唄の五木の中心地、当地を北上する五木川はやがて川辺川と板木川そして東へ久連子川へと分かれる。久連子川の源流は球磨川の源流、水上越とは裏腹の位置にあり、南に南山犬切（一五六二㍍）、北に上福根山（一六四五㍍）に挟まれて、険しい渓谷をなし、久連子集落の奥の平石（国地院の地形図には平岩になっている）で車道は行きどまる。ルートとしてはまず国土地理院の地図にある東の石楠越か、西の岩茸越のいずれかを利用できないかと調べたが、両越とも既にブッシュ化し、その形骸すらとどめぬ有様とわかり断念し、登山口をこの最奥の平石からとした。

翌朝、旅館久連子荘から幅五メートルの久連子川を渡り、すぐ造林作業道に入る。小迫谷を左下にして東南方向へ上って行く。三十分で杉林地帯をぬけ雑林にかわる。昔の石楠越の部分であったと言うが、面影すらとどめない。ヒメシャラ、シオジの群生が新緑のきざしをにおわせる。小迫谷の右岸に渡り、数分で左岸へ、そしてさらに上って小場谷の左岸にそって、うっそうとした自然林の下、苔むす岩石、倒木を越えながら伏流となった涸谷を上る。ワサビがもう白い花芽をつけている。登山口から一時間四十分の所が最後の水場



【信濃仏舎利塔】へいく道の途中に、目標の小諸ファションデパート事務所が左側にあります。

皇冠峰ベースキャンプにて

―静岡大学西域学術登山隊―

近藤　信行

昨六月十八日、クレヴァス氷河からクラウン氷河にはいり、三九〇〇㍍地点にベースキャンプを設営しました。イエチェン（葉城）を出たのが九日、ヤルカンド川上流のマザーダラからラクダ七十五頭をしたがえた七日間のキャラバンでしたが、長かったようでもあり短かかったようにもおもいます。昨夜、降雪があり、クラウンはいま白く輝いています。

アギール峠（四七八〇㍍）越えは期待していたとおり、たいへん感動的でした。眼前にカラコルムの山々を見、シャクスガムの河原を見おろしながら、ラクダとともに下ったとき、いよいよ奥地に来たなという実感が胸に迫りました。ヤングハズバンドの、あの中央アジア大旅行からかぞえて、今年はちょうど百年目にあたります。『カラコルムを越えて』を持ってきて、二十四歳の青年将校の足跡をたしかめてみたりしました。

隊長山本良三君はじめ十四名、みな元気です。シャクスガム河の増水が心配で急ぎ足で入ったわけですが、北京情報もカシュガル情報もみなはずれたようで、順調に物資を輸送することができました。中国登山協会の連絡官尚子平さんによると、中国暦の閏月のある年とかで、ちょっと予想外だったそうです。やはり来てみなければわからぬところなのでしょう。

ともかく大きな山々のなかにのみこまれています。ぎっくり腰後遺症のある小生、出かけるまえに大森薫雄、河村栄二両先生からご忠告をいただきましたが、それを守っていこうとおもっています。島田巽先生はじめ図書委員会の諸兄諸姉にどうぞよろしく。

（六月十九日　大橋晋宛）

今年もさんけんで会いましょう

鷹巣山から積岩山を歩く

で、この辺りはヒメシャラ、イチイ、ブナ、シオジ、カエデなど大樹が亭々として空を被う。これから先細りになった涸谷をつめ、さらに四十分でコンターライン一四二〇㍍の東、西にのびる稜線に出ると、左（東）へ数分で三等三角点の鷹巣山（一四五四㍍、国土地理院の地形図では蕨野山になっている）に至る。山頂は鈍頂で自然林にかこまれて展望はない。

鷹巣山からおだやかな起伏の稜線のスズタケを分けて西へ、約四十分で一四三八㍍峰の蕨野山につく。スズタケと巨樹の中の小ピークで判然としない。ここから南へ数分でスズタケ藪を脱出し、稜線にそって東、西にはしる荒れはてた幅広い造林作業道をひろって西進する。所々で南側の高塚山（一五〇八㍍）や市房山（一七二一㍍）方面の展望がえられる。再び尾根筋に戻り、スズタケの少なくなった素晴らしい自然林の中を行く。蕨野山から約五十分で三等三角点の積岩山（一四二八㍍）に達す。山頂は平頂で北側は自然林が濃厚で展望はない。またこれから西の岩茸越へはブッシュに阻まれて容易ではない。

下山は積岩山から北へ直ぐスズタケの藪を分ける。数分で杉林地帯に入り、作業道をえらびながら急坂を下ると、十数分でブッシュ化したヘリコプター発着用広場跡の東側を通り、山頂から約四十分でコンターライン九〇〇㍍の林道に出る。この林道を一㌔メートル下ると、左（西）下を流れる本川谷の堰堤をみて、さらに一㌔メートル下ると久連子の民宿平荘の上に至る。

この山系は五家荘の泉村と五木村の村境をなす背梁山脈の大きな枝尾根で、展望に恵まれないためか九州山岳関係の登山ガイドブックに見当らず、国土地理院の地図にも誤記不備があり、あえて取り上げてみた。当初の計画では五木村の竹の川そして入鴨を経由する南面ルートを考慮したが、地形図の林道は既に崩壊が多いとの情報から泉村の久連子からのルートをえらんだ。

久連子は平近盛によって開かれ、平家落人の伝説を秘める奥深い山里で、県天然記念物の久連子鶏と雅趣あふれる久連子踊りは国指定の文化財でもある。

報告・ほうこく・ホウコク

ストレッチング教室

青懇委・婦懇委

・六月二十六日（金）、午後七・〇〇～九・〇〇、神保町区民会館にて、講師・笠松美和子氏、参加者二十二名。

・七月二十一日（火）、午後七・〇〇～九・〇〇、JAC集会室にて、講師・笠松美和子氏、参加者十五名。

＊

青懇委・婦懇委共催で、二回に亘るストレッチング教室が開催された。大変好評で是非続けてほしいとの要望を得ることが出来た。

ストレッチングとは、「体の筋と腱を徐々に伸ばしてゆき、極限で十五秒～六十秒間静止させる」体操で、従来の反動をつけて行なう柔軟体操の欠点を補い、無理なく体の柔軟性を高め、健康づくりを始め、スポーツのためにも、スポーツ障害・ケガの予防にも効果が大であるといわれている。米国のスポーツ界では、十年前から盛んに取り入れられており、日本でも昭和五十五年、NHKスポーツ教室で紹介されて、大反響を呼んだ。以来各スポーツ界でも徐々にとりあげられて来ている。

二回に亘る催しでは、インストラクター、笠松さんの、理論的でしかもわかり易い説明と指導のもと、参加者一同、無理をせずで挑戦したが、皆さん、心中ひそかに或る程度のショックを受けられたのではないだろうか？「うわー、

旭岳スキー対決の記

―昭和六十二年五月二十三～二十五日―

北海道支部

去る五月下旬、大雪山は旭岳で渡辺兵力元副会長と橋本誠二支部長と、南北の豪の者によるスキー対決戦がおこなわれました。

ことの仕掛人は佐々保雄元会長。「兵力がスキー自慢をしてしかたがないから、北海道の名手・橋本ヤンチョと一騎打ちさせよう。兵力の天狗の鼻がどんな風に折れるか見ものだね。松丸君アレンジしたまえ」。山岳部の大先輩の命令は天の声と、松丸秀夫さんはさらに後輩の北海道大学の吉岡義夫さんに依頼されて、積年の話がこのたび実現されたのでした。

五月二十三日、対決する両氏を筆頭に松丸立合役ほか南北の従者十六名が旭岳を真正面に仰ぐ白雲荘に集結してきました。気配りのよく行き届いた快適な白雲荘はわがご一行様のみ。ピラニアの刺身や大野秀樹氏さし入れの大きな毛ガニなど十品にも余る山海の美味が並び、多種の酒類が雰囲気をいっそう盛り上げていました。

松丸さんから当日に至る経過報告のあと、和気合あいの自己紹介がおこなわれ、明日に期して東京組は先に引きあげたのに比べ、深夜に至っても意気盛んだったのは酒豪のヤンチョ先生や平野さんなど道内勢のみ。

明けて二十四日、道内全域に大雨雷雨注意報が出ていて天気が危ぶまれていたにも拘わらず上川地方だけ晴れるという天の配剤を喜こび、ロープウエー駅舎を出発する。雪が消えて火山礫のガラガラしたきつい尾根をスキーを背負って登る。山頂に近づくにつれて気温は下り強風となって、時には吹き飛ばされそうになり、皆に疲労の色こく見えてきた頃、寒風の吹き抜ける旭岳に着く。三時間の登り。豊かな雪を残している大雪山系や十勝岳連峰の山並がおちこちに望まれ雄大なパノラマが展開している。ふるえながら記念撮影し、いよいよ北西斜面の大滑降に移るも雪質は期待をはずれ、表面がクラストし内面が柔かくて落ちこむ、抵抗の大きいブレーカブル・クラストの悪雪。それを磯野剛太さんや井後夫人は巧みにこなしているが、あちこちで転んでいる姿があった。

かなり滑り降りた大斜面の末端に風も当らず暖かい雪の消えている場所があり、そこで大休止する。渡辺、松丸さんは「いいネェ。来て良かった。皆の足がそろっているので楽しいよ」などと朗らかに話していられる。

それからいよいよ念願の一騎打ちとなる。雪質も滑りやすいザラメに変った、格好の斜面で、一同がじーっと見守るなかを昔ながらの革のスキー靴をはいた橋本先生が先行する。荷重しながら深く沈みこんで鋭くエッジを切り換え、鋭角に回転する見事なベラスティ。さすが貫録ある名手のスキー。対する兵力先生はプラスチック靴。前者と似たベラスティで安定した滑らかさがあり、南の名手の実力を見る。南北スキー名手のこの対決は、年輪に研かれた風格があり、観戦者一同は敬服して大いに拍手をおくった。スピードを競い雪をえぐってガツガツ滑る現代スキーに比べて、雪質に応じた実戦的な山岳スキーの真髄を見た思いがする。

宿に帰り松丸名司会者を中心に湯上りのビールを飲みつつ、笑いに包まれての判定会議が行なわれる。評価の基準について様々の意見があり、技術点・芸術点というのから風格点、はては日常素行点というものもでて、結局すべてを加味して挙手採決にする。但し両氏どちらも良いとする者は

旭岳スキー対決の記

なんてカタイ…」、登山や岩を指向する私達にとって、大変有益な体操（？）であることが、体を通してよく理解出来た。またジョギングと異り屋内で場所も取らない。（勿論時間をかけ反復練習の必要はあるが……）。

この体操は、その目的に依って、フォームも考案されており、登山・岩のぼり・スキーを始め、バテないためや、体に故障のある方（肩・腰・ひざ）のための各ストレッチ体操もあるそうだ。初めての方も簡単に取り組めるし、若い人から中高年まで、誰れでも無理をせずに出来る妙味がある。皆さんにご参加をおすすめしたい。

（早川瑠璃子）

山岳映画の会

フィルム委員会

五月二十三日（土）の午後二時より、ルームにおいて、最近本会に寄贈して頂いた左の二本を上映した。

①「エピック・オブ・エヴェレスト　一九二四年」、白黒十二分（三田幸夫氏寄贈）。英国第三次エヴェレスト登山隊の実写であるが、題名のように叙事詩なので、画面は必ずしもノートン隊の時間的記録とはいえない。しかし当時のロンブク僧院や、ノースコルへの厳しい登攀、無酸素で第一ステップに向かうマロリーとアーヴィンの姿など印象的であった。

②「氷河への旅―一九五八年　ジュガール・ヒマール隊の記録」、カラー六十分（風見武秀氏撮影・寄贈）。深田久弥隊長や山川画伯、古原医師の姿もよく撮れているが、氷河を囲むプルビ・チャチュ、ガルツェンピーク、ビッグホワイト・ピーク、ドルジェ・ラクパの峯々等臨場感溢れる作品であった。ただ録音テープとフィルムの進行速度がズレ、聞苦しい点があった。

当日悪天のため、見えられなかった三田会員は残念がっておられたが、その分、風見会員が時間も忘れて当時の興味ある想出話や追悼、あるいは苦心談などお話頂き賑やかな懇談会となった。厚く御礼申上げる次第である。

出席者　風見武秀、穴田雪江、内田耕作、宇津力雄、織田沢美知子、岡野修、小山内正夫、久保孝一郎、小森恵己子、小山睦子、佐藤尚、静岡元之助、高辻謙輔、千葉保之、中村純二、羽田栄治、平井吉夫、平戸孝夫、三栖寿生、南川金一

（中村純二）

探検家列伝集中講座

海外委員会

第一回、金子民雄氏「ヤングハズバンド」、第二回、田村俊介氏「プルジェワルスキー」、第

記旭岳スキー対決の決

両方に挙手しても可、として採決へ。ジャンケンで負けた橋本先生を先決。全員の手が上がった。次の兵力先生にも全員の手が上がった。すかさず水科さんが「皆が橋本先生に挙手したとき渡辺先生の顔がこわばりましたよ」と言ったので緊張の一瞬は爆笑に破られ、満場一致で目出たく引き分けとなった。

かくして佐々大先輩の期待は裏切られたのですが、兵力先生の雪になじんだ転ばない安定したスキー。松丸先生の強い体力と確実な技。橋本先生のダイナミックな鋭い滑り。人生の大半を山やスキーに打ちこみ情熱をそそいでこられたお三方の見事な生きざまと、稚気とユーモアにあふれたこの余裕には、深い感銘をうけました。また各自の個性をもってこの楽しいプランを盛りあげた、良い山の仲間たちにも——。

（石崎貞子）

参加者 渡辺兵力、松丸秀夫、磯野剛太、磯野温子、大竹芳裕、橋本誠二、吉岡義彦、石崎貞子、藤家壮一、藤野和夫、井後幸太郎、井後道子、横田春雄、水科行雄、平野明、大野秀樹。

三回、広島三朗氏「ショーンバーグ」、第四回、片山章雄氏「大谷探検隊」、第五回、水野勉氏「趙爾豊」の講師・題名による講座を毎週連続して集中的におこないました。今回は、また聴講者の数も先着順の一定人数に限定して、ゼミナール形式で、じっくりとお話をお伺いするという意図のもとに企画されました。この初めての試みに、多少の危惧の念を憶えないではありませんが、企画者の伊丹委員の自信をもった推進により、いざ蓋をあけてみましたら、毎回欠かさずお見えになった多くの熱心な会員の方々に支えられ、大変成功裡に終りましたことを、御礼と共に報告させて戴きます。

たった一行の何でもない文章の裏にかくされた事実を、豊富な資料をもとに解明されたり、とにかく読者によって、勝手に美化し、ヒーロー化しがちな探検者達の赤裸々な人間性に迫ったりして、普段の読書から得られない大変ユニークな興味深いお話の数々でありました。

現在、この講座を担当した増島委員が、各講師のお話を一冊の本に編集いたしております。八月末までには、受講された方々のお手もとに一冊の本として配送される予定になっております。なお、受講されない方で、この本を希望される方がいらっしゃいましたら、本会事務局まで、ご連絡下さい。一冊千五百円（送料別）で配布いたします。最後に、この講座のために、テキストの作成等、陰で働いてもらった事務局の児玉委員他、多くの方々のご協力に対し感謝いたします。

また、この講座の感想を、当会会員、黒沢通子氏のご長女、亜規子氏が寄せられていますので、左に掲載させて戴きます。

（鈴木郭之）

＊

過日、ルームにて行なわれた集中講座「探検者列伝」を拝聴させて頂き、講師の方々にお礼申し上げます。

今春大学に落ちてから家に籠りきりで、高校時代の感覚がどうにも抜けず、今度の講座についても当初は〝授業のような感じ〟を想像しておりましたが、第一回目の金子民雄さんのお話が始まるや私はその専門的で研究熱心な話し振りに圧倒され、私の、虎屋の羊羹も逃げだすような、甘さに気付き、秘かな絶望感に捕われてしまいました。不勉強にも、金子さんについては宮澤賢治に関する「山と森の旅」しか読んでおりませんでしたが、金子さんの温好な風貌と、どこかゆるやかな流れのようなお話し振りに魅かれ、しっかり聞こうぞ、と気を入れ替えたのでした。

こうして始まった全五回に渡る講座は、本来の地理的な見地から、歴史的・史料的、時には言語的な見方と、各々の講師の手に委ねられ、更に探検者達の意外な探検の動機や、妙な性癖などが語られてゆき、探検家という一見ヒロイックな通念を非常に多角的に捉え直すことが出来たと思います。

また講座は堅苦しいもの許りでなく、高校の授業以上に授業らしく、愉しく聴かせて頂けたお話も沢山ありました。実際に学校の先生でいらっしゃるとお聞きした広島三朗さんのお話など、とても面白かったのですが、広島さんは、「私の先祖は遊牧騎馬民族だ」と言われ、一瞬、成程この人は私の同類だなと感じておりましたら（私は馬術と茫漠たる草地などに異常なノスタルジアを覚えるのです）、「目と目の間が離れていて、視野が広いからです」などと自己流のオチをつけて笑いをとっておられました。

以上、若輩の私がつたない筆を執りました。礼を失した所などお目に付くかと思いますが、お赦しください。ありがとうございました。

（黒沢亜規子）

＊

〔お願い〕

この度、海外委員会では、内外からの要望に応えて、海外版、日本の山のガイドブックの作成を、児玉、増島両海外委員担当のもとに、企画をいたしております。最終的には英文で発表致しますが、それまで、十ヵ月くらいかけて、まず日本語で編集をおこなってゆきたいと考えております。これには各地方支部の絶大なご協力を仰がねばなりませんが、また、各会員の中で、在京、地方を問わず、このような編集に興味をお持ちの方で、実際にお手伝いの出来る方がいらっしゃいましたら、事務局までご連絡下さい。この新しい試みに奮って会員諸兄姉のご参加をお待ちいたしております。

（鈴木郭之）

第一回京都支部・岐阜支部合同山行

五月三十日、三十一日の両日、いよいよダムに沈む徳山村の上谷山（うえんたにやま）で、第一回の両支部合同山行が盛大に行なわれた。参加者総数が六十三名という予想を越えた多人数のため、やむなく一部を下流の旅館に分宿していただくといった嬉しい悲鳴をあげることとなった。

前夜祭では久し振りの顔合せに話がはずみ、更に二次会は揖斐川の河原へ降りて満天の星の下で夜半まで高歌放唱。これに文句をいう人間はすでにここを引き払って誰もいない。

翌三十一日は絶好の登山日和、シツ谷の入り口で自己紹介の後、上谷山を目指す。だが好事、魔多し。登り始めて僅かで、一人が杣道から足を踏み外して転落。いうまでもなく斉藤ドクター（京都支部長）の出番。診断の結果は、外

傷だけのようだが、一応、大事をとって病院で診て貰った方がよいとのこと、これに何人かが付き添って下山。この時の救助振りは、さすが手速く大したものである。改めて京都支部の皆さんには御礼を申し上げる次第である。

なにもこれで全員が登山を中止する程のこともないので、大方は登山を続行。シツ谷とウエン谷を分ける尾根の側稜を喘登。流れる汗が目にしみる。それでも尾根の上にでると、一陣の涼風が肌に心地よい。

登り始めて凡そ三時間、最後は奥美濃らしくヤブを分けて登頂。能郷白山、冠山など奥美濃の山々を大観。長い休息の後、下山。来年はぜひ第二回をやろうと約束して解散。

参加者

京都支部　斉藤支部長他二十五名
岐阜支部　松井支部長他二十六名

（佐藤正雄）

静岡支部報告

一、昭和六十二年度静岡支部総会

去る六月十三日、珠賀美神社社務所で開催、以下の報告、審議、承認がおこなわれた。

（イ）支部規約改正

支部規約第四条、支部会員（個人又は団体）は、支部会費年額一五〇〇円を納める。……の傍線部分を、所定の会費と改める。

支部規約第十一条、支部役員の任期は、支部長三年、委員一年、会計監事一年とする。……の傍線部分を、すべて一期二年とする。と改める。以上賛成多数で承認された。

（ロ）昭和六十一年度支部事業報告、決算報告、会計監査報告がなされ、承認された。

（ハ）支部委員、会計監事の選任

支部委員として、磯野兼二郎、山本朋三郎、川島礼一、石間信夫、西郷正郎、川端信治、柴田昌亮、市野弘、長田義則、安間荘、鶴見敏彦、望月福次、杉本宣明、近藤浩之、永野敏夫。会計監事として、佐野敏郎、荻野恭一（敬称略）が選任された。

二、静岡支部長の選任

六月十三日におこなわれた臨時支部委員会において、新しく改正された規約にもとづき、支部委員の互選により安間荘が支部長に選任された。

三、第一回静岡支部委員会

六月二十五日、永野敏夫宅で開かれた第一回支部委員会で以下の事項が決定された。

（イ）事務局の住所変更

静岡市横内町十二、永野敏夫方（郵便番号四二〇、電話〇五四二―四六―七〇二二）に変更する。

（ロ）支部委員の職務分担

支部長、安間荘
総務、磯野兼二郎、市野弘、望月福次、永野敏夫（事務局）
会計、石間信夫、近藤浩之（事務局）
会報、西郷正郎、長田義則
企画、柴田昌亮、鶴見敏彦、川島礼一、川端信治、杉本宣明（事務局）

（ハ）第三十回紅葉会

本年十月十日、十一日に、大井川上流二軒小屋でおこなわれる第三十回紅葉会（会報に公告済）について、実行委員会を組織して進める。

委員、○安間、○柴田、○近藤、○長田、○有元、加田、田辺、水野、鶴見

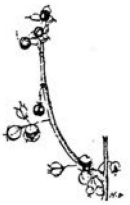
（○印は常任）

（文責・安間荘）

表C　松本アルプス山岳館保管資料（4）

番号	品名（題名）	作者・撮影者・使用者・編集者	種類・大きさ ヶ数	受入年月日	寄贈者
411	1971 UIAA 記念メダル				
		ユーゴスラビア 山岳会	1	49.	
412	フランス山岳会百周年記念メダル 1974				
		フランス山岳会	1	49.	
413	大雪登山記念品	旭川 アイヌ民芸協会	1	49.	石山長次郎
414	1976 UIAA 記念品（灰皿）				
		スペイン山岳会	1	51.	
415	1972記念額	中国山岳会	1	47. 6.	中国山岳委員会
416	1981記念桶	韓国山岳会	1	56. 4.29.	韓国RM山岳会
417	1982 グルカ隊桶	英国山岳会	1	57. 6.	
418	絵皿（馬）1984	中国山岳会	1	59. 6. 4.	北京体育研究所
419	1984 UIAA 記念品（皿）				
		韓国山岳会	1	59.	
453	エベレスト 実体模型（石膏）45万分の1		箱入 1	45.10.	長野橋床
476	トロフィー（日本スポーツ賞）				
		カンチェンジュンガJAC遠征隊	1		
477	JAC 40周年記念品（インク壺）				
		高野鷹蔵氏宛	1	60.12. 1.	高野岳雄
478	北極焼 グイ呑	植村直己作	1		植村直己
512	ウェストン祭の 歌（譜）				
		楽譜・歌詞	額入 1		
514	レーニン峰（レーニン氷河より）		額入写真 1		
515	マナスル峰	槇氏（ベースキャンプへの道）			
			額入写真 1		
517	槍ヶ嶽絵図（松本平野俯瞰図）		額入 1		
518	仁寿峰		写真 1		韓国山岳会
519	会員スナップ	槇・三田・松方	額入写真 1	60. 8.30.	安彦六郎
520	〃	日高・折井・加藤・神谷			
			額入写真 1	〃	〃
521	未来の 登山イラスト	（20 年後）	パネル 1	〃	集会委
522	会員アンケート 結果	（20 年後のJAC）	〃 1	〃	〃
523	20年後の 登山スタイル		〃 1	〃	〃
524	岩登り	川森左智子	〃 写真 1	〃	婦人懇
526	大正8 年富士登山		パネル 写真 1	〃	〃
527	ヒラリー卿来日記念		〃 1		
528	オデール氏来日記念		アルバム 1冊		

会報4月号（No. 502）の日本山岳会保管資料のつづき



熊本支部総会

熊本支部の六十二年度総会は、五月三十一日、阿蘇地獄温泉の国民宿舎「南阿蘇」で開かれた。

総会は、西沢支部長の挨拶、議長選任のあと議事に入り、事務局よりの配布資料にもとづき、六十一年度事業報告、収支決算。六十二年度事業計画。支部規約の一部改正が承認され、支部役員を左記の通り選任した。このあと近くの

オカマド山（一一五〇㍍）へ一時間程の軽いハイキングを楽しんで、正午すぎ現地解散した。

◎支部役員

支部長　西沢健一、常務委員　田上敏行、和仁古昇、委員　本田誠也、松本莞爾、菊池更生、川端浩文、監事　馬場猛

出席者　奥野正亥、馬場猛、千代子、西沢健一、石井久夫、本田誠也、多田隆峰、田上敏行、大木野徳敏、松本莞爾、川端浩文、河上洋子、広永峻一

（田上敏行）

会務報告

六月理事会

6月10日午後6時30分

場所　本会ルーム

出席者　今西会長、大塚副会長、鴫原、橋本、大橋、鈴木、新井、田部井、関塚、織田沢、太田、岡沢、大森、勝山、小林、早坂各理事。松田、中島、平林、山野井、広羽各評議員。山本監事。

委任　村木副会長、浜口、松永、西村各理事。太田監事。

審議事項

◎常務理事として、出席理事互選の結果、鴫原、鈴木、橋本、西村、新井各理事が選任された。

◎各理事の担当＝鴫原（総務、遭対）、鈴木（海外）、大橋（図書）、松永（高所登山）、橋本（三国合同登山）、浜口（医療、科学）、大森（山岳）、岡沢（会報）、新井（集会）、関塚（自然保護）、太田（山研）、織田沢（山日記、フィルム、資料）、田部井（婦懇）、西村（財務）、早坂（青懇、学生部）、小林（指導）、勝山（総務（固定資産）、青懇）

OA委員会は松田評議員をヘッドとして、西村、橋本両理事がフォローする。

承認

報告事項

◎今西会長より、組織の見直し及びJACの活動の一層の活性化を計るため、会長の諮問に答える機関として元副会長経験者の吉沢一郎、田口二郎、望月達夫、織内信彦、渡辺兵力の五氏よりなる諮問調査委員会を作り、とりあえず十二月末までに諸事項の答申を得たいとの構想が述べられた。

◎常任評議員として、松田、小

表D　秩父宮記念スポーツ博物館保管資料

番号	品名（題名）	作者・撮影者・使用者・編集者	種類・大きさ　ケ数	受入年月日	寄贈者
258	ﾋﾟｯｹﾙ	JACﾏﾅｽﾙ隊	1		
336	ﾃﾝﾄ	〃	1式		
337	ｻﾞｲﾙ	〃	1		
338	ｼｭﾗｰﾌ	〃	1組		
339	羽毛服上・下	〃	1着		
340	帽子	〃	1		
341	ｵｰﾊﾞｰ手袋	〃	1双		
342	ｵｰﾊﾞｰｼｭｰｽﾞ	〃	1足		
343	ｱｲｾﾝ	〃	1足		
344	ｶﾗﾋﾞﾅｰ	〃	2ヶ		
345	ｱｲｽﾊｰｹﾝ 長	〃	2ヶ		
346	ｱｲｽﾊｰｹﾝ 短	〃	4ヶ		
347	ﾛｯｸﾊｰｹﾝ	〃	4ヶ		
348	ﾊﾝﾏｰ	〃	1		
349	ｸｯｶｰ	〃	1式		
350	ｺｯﾍﾟﾙ	〃	1式		
351	酸素ﾏｽｸ	〃	1式		
352	背負子（ﾎﾞﾝﾍﾞ3ヶ入）	〃	1式		
353	ﾌﾟﾘﾑｽ ｶﾞｽｺﾝﾛ（大）	〃	1ヶ		

図書受入報告

図書委員会

昭和 62 年 6 月分受入図書

1. 本多勝一編「知床を考える」晩聲社　1987（版元寄贈）
2. C・J編集部編「穂高岳の岩場」白山書房　昭和 62（版元寄贈）
3. 宇江敏勝著「青春を川に浮かべて」福音館書店　1987（版元寄贈）
4. 宇江敏勝著「若葉萌えいづる山で」福音館書店　1987（版元寄贈）
5. 「夏山相談所第 30 回記念　山・自然を愛して」松坂屋上野店山松会事務局　昭和 62（版元寄贈）
6. 呉藹宸著　楊井克巳訳「中国辺境歴史の旅 1　新疆紀遊」白水社　1986（版元寄贈）
7. 劉曼卿著　岡崎俊夫・松枝茂夫訳「中国辺境歴史の旅 2　女性大使チベットを行く」白水社　1986（版元寄贈）
8. E・タイクマン著　水野勉訳「中国辺境歴史の旅 3　東チベット紀行」白水社　1986（版元寄贈）
9. A・フォン・ル・コック著　羽鳥重雄訳「中国辺境歴史の旅 4　東トルキスタン風物誌」白水社　1986（版元寄贈）
10. R・ショーンバーグ著　雁部貞夫訳「中国辺境歴史の旅 5　中央アジア騎馬行」白水社　1986（版元寄贈）
11. V・I・ロボロフスキー著　田村俊介訳「「中国辺境歴史の旅 6　天山から青海へ」白水社　1987（版元寄贈）
12. 副島次郎著「中国辺境歴史の旅 7　アジアを跨ぐ」白水社　1987（版元寄贈）
13. 堀賢雄著「中国辺境歴史の旅 8　西域旅行日記」白水社1987（版元寄贈）
14. 松本徑夫　松原正毅編著「遥かなる揚子江源流」日本放送出版協会　1987（松本徑夫氏寄贈）
15. 尊仏編纂委員会編「尊仏」さがみの会　1987（山岸猛男氏寄贈）
16. 花畑日尚著「日本の名峰 9　日光・足尾・南会津」山と渓谷社　1987（版元寄贈）
17. 小林泰彦著「低山逍遥」山と渓谷社　1987（版元寄贈）
18. 金子博文著「北アルプス山小屋案内」山と渓谷社　1987（版元寄贈）
19. 山里寿男著「山里寿男画集　春ふたたび」山里寿男　1987（山里寿雄氏寄贈）
20. "Mt. Saint Helens" Skybird Slide Sets（新谷榮三郎氏寄贈）

倉、山野井、平林、中島の五氏が選任された。
委員会報告
◎三国合同登山実行委員会の経過及び募金委員会の概況
◎自然保護全国集会を十一月十四、十五日東京で行なう予定

（6月）

3日　海外委講演会Ⅳ
4日　常任評議員会、婦人懇談会
若葉山行写真交換会
9日　海外委講演会Ⅴ
10日　理事会
11日　学生部講習会
15日　図書委員会、博物館を考える会
17日　三水会
18日　山研委員会
23日　映画会（海外委）、フィルム委員会
26日　火山講演会（科学委）
29日　常務理事会、総務委員会
30日　自然保護委員会

6月来室者380名

会員異動

退会
芦沢欣吾（五五〇〇）
福井芳隆（六二一九）
佐々木輝美（九〇四〇）
長谷河良彦（七五四四）

物故
服部鉱一（一四二七）4・5
夫婦会員へ
長清眞砂子→水谷眞砂子

お知らせ

昭和六十二年度 地方ブロック懇親会京都大会

目的　支部間の渓間を越えて全国の会員が一堂に会し、親睦を深め、日本山岳会の連帯意識を高める。また、日ごろなじみのうすい地域の山に登る機会を提供し、京都近郊の山の良さを知ってもらう。

場所　講演会は京都市下京区堀川通正面下ルの西本願寺会館。懇親会は滋賀県滋賀郡志賀町「比良山の家」と「柳家」。登山は比良山系。

日程

・十月三十一日十三時より講演会
「京都における近代アルピニズムの曙」
講師　桑原　武夫氏
十七時二十分より懇親会

・十一月一日八時三十分より登山（四コース）
①リフト・ロープウエイ→武奈ヶ岳登山
②イン谷口→ノタノホリ→堂満岳→正面谷峠→釈迦ヵ岳→ヤケオ山→ヤケ山→涼峠→揚梅滝→JR北小松
③リフト・ロープウエイ→山上駅・北比良峠→釈迦ヵ岳→ヤケオ山→ヤケ山→涼峠→揚梅滝→JR北小松
④リフト・ロープウエイ→金糞峠→烏谷山→木戸峠→打見→蓬莱山→打見ゴンドラ→山麓駅→JRしが
＊四コースとも比良山麓にて現地解散

募集人員　一三〇人（先着順）

参加申込　九月二十日までに官制ハガキに、住所・氏名・年令・会員番号・会員外同伴者・希望コースを記入し申し込んで下さい

申込先　〒606京都市左京区北白川追分町　京都大学農学部林学教室　岩坪五郎気付
日本山岳会京都支部全国大会係

会費　九千円。申し込みと同時に郵便振替（振替番号　京都七―三三一七七、日本山岳会京都支部）にて送金して下さい。確認後詳細な案内書を送付します。登山のみ参加の方は千円で、弁当を各自持参して下さい。

◉なお、十一月三日、希望者には西本願寺の国宝や重文の拝観、京都観光もお世話します。

京都支部

☎ 234-6659

この電話でもお知らせしています

◉ビール・パーティのお知らせ

恒例のビール・パーティを催します。今年は黒田初子さんのお話があります。

日時　九月五日（土）
　　午後五・〇〇～七・〇〇
場所　日本山岳会　集会室
会費　二千円

乞ご期待！　新入会員の方及び地方会員の方の参加大歓迎！

婦人懇談会

＊

◉第三回ストレッチング教室開催

日時　九月十七日（木）
　　午後七・〇〇～九・〇〇
場所　麹町四番町区民集会室
講師　笠松美和子
会費　千円　定員三十名
申し込み期日　九月十日まで

申し込み・問い合せは事務局（03-261-4433）まで

区民集会室への直接問い合せ禁止

※持参するものはトレーニングウエアとタオル

青年懇・婦人懇共催

＊

◉現地小集会案内

◆鉢盛山　九月二十七日（日）
　塩尻駅　午前七時三十分集合
　日本アルプスのほぼ中心に位置し、中部山岳の大展望台である。山頂近くに高層湿原『権現の庭』がある。歩行六時間

◆上州武尊山　十一月八日（日）
　上ノ原山の家前　午前六時集合
　雄大な裾野を引いた姿の美しい独立峰。歩行九時間

◆倉岳山　十二月二十日（日）
　鳥沢駅　午前九時三十分集合
　道志山塊の静かで、好展望が楽しめる山。歩行五時間

◆スキー新年会（場所―未定）
　一月十五日（金）―十七日（日）

◆月居山―男体山　二月七日（日）
　袋田駅　午前九時集合
　奥久滋県立自然公園に属し男体山までの尾根道。近くに氷爆で知られる袋田ノ滝がある。歩行六時間

〇申し込み、詳細は集会委員の神山良雄（☎0423-76-1177）へ

集会委員会

＊

◉62年度図書交換会

十月二十四日（土）午後二時より本会ルームにて恒例の図書交換会を行ないます。

お手もとにある不要な山の本を持ち寄り、必要なものと交換するというのが本来の主旨です。出品ご希望の方はご連絡下さい。

図書委員会

◉映画会とスライドによる講演会

●フランス山岳映画の夕
山岳劇映画
「あるガイドの死」
日時　九月二十九日（火）
　　午後六時半
場所　本会集会室

●スライドと講演の夕
講師　オレグ・シュミロフ（ソ連スポーツ・マスター）
日時　十月二十七日（火）
　　午後六時半
場所　本会集会室

同氏が七人の隊員をつれて、フアンスキー・ゴーリエ（高度差二千メートルの逆層の岩壁、パミール）を十日間かけて初登攀したスライドの上映と、合せてソ連の山岳事情を講演していただきます。

指導委員会・海外委員会

＊

◉フィーゲルのすすめ
――講演と製作実演――

期日・場所
　九月八日（火）午後六時三十分より、本会ルームにて
講師　講演　玉木正之
　　製作実演　松丸秀夫

フィーゲルは短いスキーで、残雪期の山行に極めて有効です。

短いフィーゲルは長さ四九㌢、両方で七〇〇㌘（前号会報に七〇〇㌘とあるのは誤り）のものもあり、これで白馬の大雪渓を快調に滑り下りることができます。

乗鞍の大雪渓ではスラローム大会が行なわれます。

やや長目のフィーゲルはフィギュアスキーをやれるようにも作れますし、目的に応じて、いろんなものを作れば興味深いものです。

科学研究委員会

編集後記　前号は総会記事が多かったため、今月は増ページです。

昭和六十二年八月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五―四
サンビュウハイツ四番町
発行所　社団法人　日本山岳会
発行者　今西寿雄
編集代表　岡沢祐吉
電話東京（261）四四三三
振替口座　東京三―四八二九番
東京都港区赤坂一―三―六
赤坂グレースビル
印刷所　株式会社　技報堂